



昭和20年の暮れ、大通西4丁目から移築された吉田診療所。写真は翌年6月に撮影したものの

長かつた無医村時代。 吉田医師が開業し、 村民に伝える 責任感強い

札幌に近すぎて医者が定着しない

白石村は開村以来長い間無医村時代が続いた。明治35年(1902)以降は札幌から巡回してくれる囑託村医や学校医はいたが、札幌の病院にかかることができるほど札幌に近かったので、なかなか開業医が来てくれなかった。

太平洋戦争が激しくなるにつれて栄養状態は悪くなり、結核などで病んだり、衰える人が増えてきたが、そういう人たちが超満員列車に窓から乗り込んで札幌の病院に通うのは無理なことだった。

村人からの強い要望を受け、村役場は札幌医師会の副会長吉田廣に適任者の斡旋を頼んだ。しかし、若い医師が次々と軍医として戦場に送り込まれているときであり、簡単には見つかるはずもなかった。

吉田病院に疎開令、村医を決意

そうこうするうち、吉田医師会副会長の吉田診療所(北大通西4丁目南角)が戦時の重要施設である電話局に隣接しているために建物疎開令を受け、他へ疎開しなければならなくなった。吉田院長は村医の斡旋を引き受けた責任を強く感じていたときでもあったので、これを機に自分が村医になることを決

心した。

吉田廣は明治28年11月に松前郡福島町で生まれ、千葉医専を卒業してから北辰病院に勤務し、北辰病院退職後の昭和3年(1928)に大通西4丁目に吉田診療所を開院していた。



診察カバンを肩にかけて白石村を歩いて往診する吉田医師



さっそく村から収入役と村議が出向き、正式に交渉したが、心が清く欲のない吉田医師はなんの条件も出さず、村医として村に移り住んで開業すると快諾してくれた。

診療に尽くし村人の信頼を得る

病院を解体して白石に移築することにしたが、時間的に間に合わないのと、とりあえず石炭坑爆発予防試験所（今の平和通3丁目）北隣の北日本精機の応接間を借りて仮の診療所とし、自分たちや看護婦の住まいは、向かいの4軒長屋の2軒を借りて昭和20年5月8日に開院した。

開村以来75年目の白石村診療所の実現である。12月5日には移築が完了して、50センチの雪の中を移転し、現在地に開業した。

吉田院長は尊大ぶることもなく、金持ちも貧乏人も区別せずに温かく診療に尽くした。札幌にいたときはお抱えの車夫が引く人力車に乗り、白足袋に羽織袴だったのに、遠方への往診もいとわずに下駄で歩き、愚痴ひとつこぼすこともなかった。

昭和25年に白石村が札幌市と合併した際に再び個人開業医吉田診療所に戻って地域医療を推進したが、翌26年5月18日、胃潰瘍が原因で亡くなった。57歳だった。

この間、札幌外四郡医師会長、社会保険報酬審査委員、北海道医師会常任理事などを勤め、さらに趣味の謡曲・狂言・俳句・古川柳研究などの面でも才能を発揮した文化人だった。

（塩見一釜）



昭和30年頃の吉田病院。敷地内にバス停の待合所を子息の吉田信医師（今の院長）が手作りで建てた



昭和23年頃撮影の米軍航空写真で見る仮住まいの吉田医院